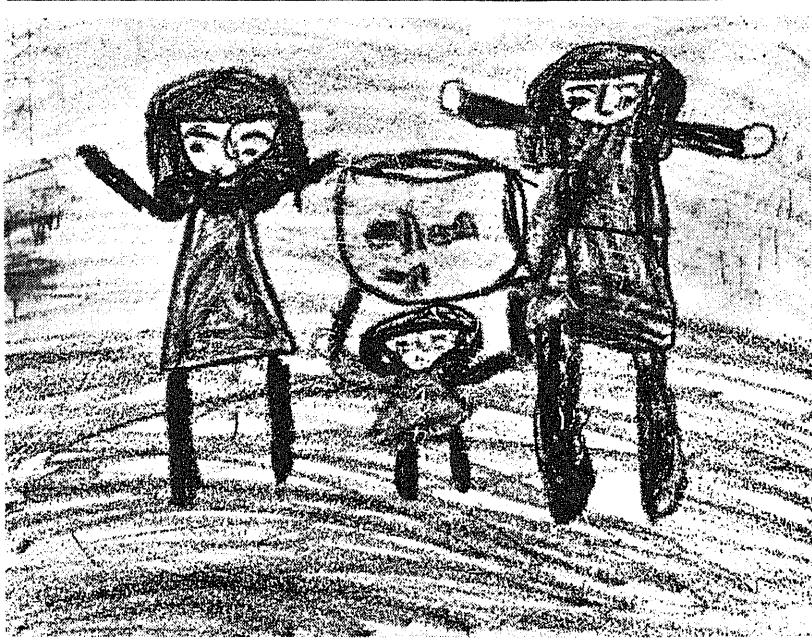


幼児の教育

昭和四十一年六月



これはどうしてゐるところですかと尋ねたら、「金魚を頭に載せて散歩」と答へた。奇想天外と思ふのはおとなの方で、子どもにとつては何んでもない、あたりまへのことである。散歩にはいつしょに往きたし、金魚のそばには居たし、と言つて、金魚を歩かせることは出来ない。一匹づゝ抱いてゆくことも出来ない。水鉢の水のまゝ持つてゆくより外ないのは、子どもとして當りまへ過ぎる程當りまへのことである。又、その大きい硝子の水鉢を、手にぶらさげてはゆけない。水をこぼしたら金魚に可愛そうだ。そこで、頭の上に載せて歩くのは、奇想でも、ふざけでもない、それこそ當りまへの中の當りまへである。

それを、止めもせず、笑ひもせず、いつしょに散歩してゐるお父さんとお母さんも大まじめである。わたし達も此繪を、まじめに見たい。——子どもとのどんな繪の場合でも。（倉橋惣三）